第二篇　幽界（ゆうかい）より神界（しんかい）へ

霊主体従　子の巻〔霊界物語 第一巻〕

第一二章　顕幽一致（一二）

自分（王仁）が高熊山中における、顕界と、霊界の修業の間（幽界の修行の間）に、親しく実践したる大略の一端を略述（、前号に於て照会）してみた（置いた）のは、真の一小部分に過ぎない（事実談である）。（王仁は、今後本誌上に、引続いて執筆して見ようと思う。）

すべて宇宙の一切は、顕幽一致、善悪一如にして、絶対の善もなければ、絶対の悪もない。従ってまた、絶対の極楽もなければ、絶対の苦艱もないといって良いくらいだ（のである）。歓楽の内に艱苦があり、艱苦の内に歓楽のあるものだ（である）。ゆえに根の国、底の国に墜ちて、無限の苦悩を受けるのは、要するに、自己の身魂より産出したる報いである。また顕界の者の霊魂が、常に霊界に通じ、霊界からは、常に顕界と交通を保ち、幾百千万年といえども易ることはない（のである）。神諭に、「……（示されたる如く、）天国も地獄も皆自己の身魂より顕出する（のである）。故に世の中には、悲観を離れた楽観はなく、罪悪と別立したる真善美もない（のである）。苦痛を除いては、真の快楽は求められ（る）るものでない。また凡夫の他に神はない。言を換ていえば善悪不二にして正邪一如である。〈……〉仏典にいう。「煩悩即菩提。生死即涅槃。※ぼんのうそくぼだい ※しょうじそくねはん 娑婆即浄土。※しゃばそくじょうど 仏凡本来不二」※ぶつぼんほんらいふじである。神

※善悪不二……自然界の法則をを基礎としては、その真相は別にして、この言葉はわれわれ人間が言うべき言葉ではないのです。神さまは善悪正邪の区別によって、その大愛に厚さ薄さの区別がない意味を言うのです。

※煩悩即菩提……〔仏〕相反する煩悩（衆生の心身をわずらわし悩ませる一切の妄念）と菩提（悟り）とが、究極においては一つであること。煩悩と菩提の二元対立的な考えを突破・超越すること。

※生死即涅槃……〔仏〕生死の迷いの世界と涅槃の悟りの世界とは相互に対立するように見えるが、仏の境地から観察すれば、生死の差別相を離れて涅槃はなく、涅槃の平等心を離れて生死はない。

※娑婆即浄土……〔仏〕苦難に満ちたこの娑婆世界が、すなわちこの上ない極楽浄土である、という意。

※仏凡本来不二……尊い仏の心と、ただの

の道からいえば「※神俗本来不二」が真理である。

仏の大慈悲というも、神の道の恵み幸はいという（の）も、凡夫の欲望というのも、その本質においては大した変りはない（のである）。凡俗の持てる性質そのままが神であるといってよい。神の持っておらるる性質の全体が、皆ことごとく凡俗に備わっておるといって〈も〉よい（のである）。

※天国浄土と社会娑婆とは、その本質において、毫末の差異もない〈も〉のである。かくの如く本質においては全然同一のものでありながら、何ゆえに神俗、※浄穢、正邪、善悪が（と）分るるのであろうか。要するに此の本然の性質を十分（充分）に発揮して、適当なる活動をすると、せぬとの程度に対して、附したる仮定的の符号に過ぎないのだ（である）。

善悪というものは決して一定不変のものではなく、時と処と位置とによって、善も悪となり、悪も善となることがある。（人を殺すのは悪に相違ないが、一朝宣戦の詔勅が降って、勇士が戦場に出て敵を殺傷しても、是を以て大悪と云う事は出来ない。寧ろ軍功者として賞賛されるようなものである。）

道の大原にいう。「善は天下公共のために処し、悪は一人の私有に所す。正心徳行は善なり、不正無行（不正無行）は悪なり」と。何ほど善き事といえども、自己一人の私有に所するための善は、決して真の善で〈は〉ない。たとえ少々ぐらい悪（悪分子）が有っても、天下公共のためになる事なれば、これは矢張善と言わねばならぬ（のである）。文王

凡夫の心とはもともと同じだということ。
※神俗本来不二……前項の仏と神との違いで、同じ意味です。

※天国浄土……苦難のない楽園。
※浄穢……〔仏〕①悟りと迷い。善と悪。②浄土と穢土。

一たび怒って天下治まる。怒るもまた可なり、というべしである。

これより推し考うる時は、小さい悲観の取るに足らざるとともに、勝論外道的の暫有的※小楽観もいけない。大楽観と大悲観（大悲観と大楽観）とは結局は同一に帰する〈も〉のであって、神は（とは）大楽観者であると同時に、大悲観者である。

凡俗は小なる悲観者であり、また小なる楽観者である。社会、娑婆、現界は、小苦小楽の境界であり、霊界（天国浄土）は、大楽大苦の位置である。※理趣経には、「大貪大痴是れ※三摩地（三摩地）。是れ浄菩提。淫欲是道」とあって、いわゆる当相即道の※真諦（真諦）である。

禁慾主義はいけぬ、恋愛は神聖であるといって、しかも之を自然主義的、本能的で、すなわち自己と同大程度に決行し、満足せむ（ん）とするのが凡夫である。これを拡充して、宇宙大に実行するのが神である。

神は三千世界の蒼生（衆生）は、皆わが愛子（子）となし、一切の万有（衆生）を済度せむ（ん）とするの、大欲望がある（のである）。凡俗はわが妻子眷属のみを愛し、すこしも他を顧みないのみならず、自己のみが満足し、他を知らざるの小貪慾を擅（慾）にするものである。人の身魂そのものは本来は神である。ゆえに宇宙大に活動し得べき、天賦的本能を具備しておる。それで此の天賦の本質なる、智、愛、勇、親を開発し、実現するのが人生の本分である。これを善悪の標準論よりみれば、自我実現主義とでもいうべ

※暫有的小楽観……しばらくのあいだは物事をよい方に、気楽に考えること。

※理趣経……〔仏〕真言宗の常用経典。大日如来が金剛薩たのために般若理趣の自性清浄なることを説いたもの。

※三摩地……〔仏〕心が統一され、安定した状態。一つのことに心を専注して無念になること。

※当相即道……〔仏〕世間の種々なすがたがそのままに深遠な道理を表す、という意。

きか（ものである）。吾人の善悪両様の動作が、社会人類のため済度のために、そのまま賞罰二面の大活動（大威力、大活動）を呈するようになるものである。この大なる威力と活動とが、すなわち神であり（る。）、いわゆる自我の宇宙的拡大である。

いずれにしても、この※分段生死（分段生死）の肉身、※有漏雑染の※識心を捨てず、また※苦穢濁悪（濁悪）不公平なる現社会に離れずして、ことごとく之を美化し、楽化し、天国浄土を眼前に実現せしむるのが、吾人（皇道大本）の成神観であって、また一大眼目とするところである。

（大正一〇・二・八　王仁）

瑞月

かくり世のこと細やかにしるしたる
書は霊魂の力なりけり

※分段生死……〔仏〕六道に輪廻する凡夫の生死。六道に輪廻するものは、寿命にも果報にも長短のきざみがあるから分段という。

※有漏雑染……〔仏〕諸々の煩悩（衆生の心身を悩乱し、迷界に繋留させる一切の妄念、貪・瞋・痴・慢・疑・見を根本とし、その種類は多い）になじむこと。

※識心……〔仏〕心所法に対して、六識または八識となってはたらく心をいう。

※苦穢濁悪不公平……苦しみ悩み、汚れや罪悪に満ちている現世は公平ではないということ。